

# 知の様式としての〈知らない〉

● 池田光義

## はじめに

一般に、〈知らない〉は〈知っている〉の単なる否定ないし対立物にすぎないと思われてはいないだろうか。〈知っている〉とは〈知らない〉の正反対であり、〈知らない〉状態を単に決然と克服し離脱することであると考えられていないだろうか。つまり〈知らない〉と〈知っている〉とは水と油のごとき両立不能な相互排除の関係にあるとイメージされていないだろうか。本稿は、不知と知に関するこの通念を批判し、両者を相互的連関・制約において捉えなおそうという試みの第一歩である。あるいは少なくとも、〈知らない〉という知の様態について、私たちはあまりにも知らないのではないか、知ろうとしていないのではないか、という疑問を——「試み＝エッセー」の伝統的な意味に寄りかかり、断章形式を用いて——提示する試みである。

## 1. 知の様式としての〈知らない〉の構造・特徴

〈知らない〉とはどのような構造と特徴をもつのだろうか。まず、ソクラテスの「無知の知」を俎上に載せて考えてみよう。納富（2003：47）によると、他の者たちは知らないことを知っていると思っているのに対し、ソクラテスは何も知らないということを知っているというただ一点で知恵者であるという「無知の知」の理解は、後世のアカデメイア派懐疑論者らの曲解により成立し、クザーヌスの「知ある無知」と結びついて定着したのだという。その結果、第一にドクサにすぎない「無知（不知）の自覚・容認」が独断論的な「無知の知」に変容し、第二に「何も知らない」という知の全称否定が紛れ込むことになったという。ここでは第二の知の全称否定についてのみ問題にする。まず確認すべきことは、ソクラテスの無知は善美などの倫理的な究極価値に関するものであり、そこでは〈～に関して〉という知らないし不知の主題化の範囲が厳密に限定されている点である。善美の事柄に関する無知の自覚が最高の知恵なのだということであり、それ以外のもろもろの事項に関するさまざまな知や無知は主題化されていないのである。さらに、ソクラテスは、「日常的常識、技術的知識、学問的知識」が豊富なうえに、①「エレンコス〔対話〕によって基礎付けられた『正当化された可謬的知識』」、②「その正当化の基礎となる『真なるドクサ』」、③「神からのメッセージに基づく『生き方についての確信』」（岩田、1995：106）を所有している。

ソクラテスは、知らないということ以外は何も知らないどころか、大変な知者なのである。では、ソクラテスが善美の事柄に関して〈何を知らなかった〉のか。倫理的な究極価値についてそれなりに確実な断片的知識は有していても、「断片的知識をしっかりと纏めて組織化できる、原理的な一般理論」「体系的普遍的根源的な知」（同上：118）を〈知らなかった〉というのである。ここではソクラテスの「無知の知」自体の解釈が問題なのではない。本稿の関心に照らして、ただひとつ、この「無知の知」が〈知らない〉ということに関して三つの要点を哲学史上はじめて示しているという点を押さえておきたいのである。すなわち、(1)〈知らない〉には一人称と三人称の区別があること。(2)〈知らない〉は一定の知を前提とし、一定の知のなかでのみ成立すると

いうこと。(3)〈知らない〉という知の様態では、自己反省的な意識を伴う一種のメタ知が主導するのである。

(1)客観主義的・普遍主義的な知識論にしてみれば、知の人称性を語ること自体、錯乱以外の何ものでもないだろうが、知には人称性が確かに存在するのである。客観的・普遍的な知と理解されているものの大半は、実体視・絶対視された三人称の様態の知にすぎない(西垣、2013)。知が人称性を帯びていることを端的に物語るのが、死についての知である。巷に流布する死の観念は一般的・客観的・抽象的な性質を有し、いつでも、どこでも、誰にでも通用する三人称的な知である。しかし、自己にとって唯一無二の掛け替えのない人物の死を体験するとき、その死が三人称的な死とはまったく異質のものであることを知る。それこそまさに、二人称的な死についての一人称的な知であり、それは具体的で唯一的な一・二人称的状况における直接的・個別的で一回的な一人称的体験によってしか成立しない知である。むろん、言葉による明示的な記述・説明をうけつけない。

〈知らない〉にも人称性がある。その根源的な事例はやはり死に関するものである。私自身の一人称的な死を、私は一人称的な様態では知らないし、知ることもできない。知ることができるのであれば、それは三人称的な知の様態においてにすぎないのである。それは、すでに存在しない私が私自身の死をもはや体験できないという意味だけではない。そもそも、死にゆく生は存在しても、〈死それ自体〉なるものは存在しない。ある個人の死といわれるものはその個人が端的にもはや生きてはいないという事態を意味するにすぎず、死の観念はかかる否定的事態を積極的に実体視することで成立する(少なくとも生の否定と死とは存在論的に同値ではない)。私の現実の死を実体視できるのはしかし、もはや存在しない私ではなく、まだ生にある第三者でしかない。私が自身の生を観念において先取的に実体視するにしても、それによっていわば歴史的な既成事実としての私の具体的で現実的な死についての知を、私がもてるわけではないし、何よりも、その実体視によって得ることができるとされる死の観念は一人称としての私の死ではなく、あくまでも他者化され対象視された私の死、他者の死と同じように捉えられた死でしかない。一人称としての私の死について、私は一人称の様態ではあくまでも〈知らない〉のである。

興味あることに、そもそも「私はXが何であるのかを知らない」、「私はXがPであるのかどうかを知らない」とはいえども、「私はXがPであることを知らない」とはいえない。他者Sについて「SはXがPであることを知っている」とも「SはXがPであることを知らない」ともいえることと、それは著しい対照をなしている。「ある者はXがPであることを知らない」と語ることができるのは、XがPであること(およびその者の知の状態)を知っている者だけだからである。もちろん、「私はXがPであることをそれまで知らなかった」と過去形ではいえるが、そのときの私の不知は客観視され三人称化された様態を帯びている。知の様態が〈知っている〉の場合には、「私はXがPであることを知っている」と「その人物はXがPであることを知っている」との両方が成立し、知の主体が一人称でも三人称でも異同はないが、〈知らない〉の場合には、主体が一人称と三人称ではいささか勝手が違うのである。

(2)〈知らない〉という事態もひとつの知の様態であり、一定の知を前提にしている。どういうことか。もう少しつぶさに、ある種の知の様態としての〈知らない〉の基本構造を検討してみよう。〈知らない〉という知の応対に特徴的なことは、それが常に「ある何かXについて知らない」という構造を呈することである。何について知らないのかも知らないような〈知らない〉は、知の様態としてはあり得ないのである。ある者が「ベニオキナエビス(貝の一種)とは何か」と問われ、「それについては何も知りません」と答えるとき、その者がそれについて実際に何も知

らなければ、そうは答えられないはずである。「いや、答えられる。だって実際にベニオキナビスとは何なのか知らないもん」と直截な反撃があるかもしれない。しかし、その場合でも、少なくともそれが何かある対象の名称であることは知っているのである。一定の範囲内で、「たぶん哲学関連ではないし猫にも関係ないだろう」という否定知が働くかもしれない。具体的な状況、場面が与えられれば、「何について知らないのか」に関して<知っている>ことはさらに詳しくなり現実さを増すであろう。この「ある何かXについて」という、不知に含まれる<主題化された知の志向対象Xについての知>は、Xについての不知に関するすぐれてメタ認知的な性質をもつ知である（不知のメタ知）。「Xについて何も知らない」という者も、少なくとも「何に関して」知らないのかは熟知しているのである。<知らない>のは主題化された志向対象Xについての認識内容なのである。

つまり、ある対象（事物、事態、性質、関係など）にかかわる不知は、それが何に関する知なのかという<メタ知>の存在と、対象そのものに関する<対象知>の内容の不在という両契機から成り立っているのである。そして知の志向関係に関するメタ知の所有と、知の対象自体に関する対象知の欠如という際立った不均衡・非対称性、著しい落差こそ、知の一樣態としての<知らない>の構造的本質をなす。私たちは、この不均衡や落差を意識すればするほど、自己がXについて<知らない>ことを自覚する。というよりもむしろ、Xに関するメタ知と対象知とのこの顕著な不均衡の存在についての<メタメタ知>が成立してはじめて、Xについて<知らない>という知の様態が立ちあがるといえる。知の様態をメタ知と対象知との複合・重層のあり方によって捉えたとすれば（池田、2012）、メタ知は、<知っている>様態では対象知の内容の現実性や重要度や成立範囲などに関するものが主流であるのに対し、<知らない>様態では対象知の欠如、ないし自己と対象知との齟齬に関するものが大半を占めているということになるだろう。

(3)「無知の知」の思想にみられるように、<知らない>ことを知るという場合、自覚や自己意識に結びつけられやすいが、そのことの意味を考えてみるのは重要である。「無知の知」が「無知の自覚」と同義とされるのは、<知らない>は<知っている>以上に主題化された対象に対する自己の欠性関係に関するメタ意識が強くはたらいている場合が多いからであろう。何かを知っている場合、それをよく知っていればいるほど、その何かに知識主体の意識が、注意や関心が没入・一体化し、対象に対する自己の関係や自己自身の様態については意識野から消えがちになる。これに対し、何かを<知らない>とは、何かを知らない自己の知の（否定的）様態を大なり小なり強く意識することを含有している。「Xについて知らない」という意識の事態は「Xについて知らないといことを知っている」という意識の事態でもあるのだ。「私はXについて知らない」と強く意識すればするほど、対象への自己の関係や自己のあり方が負性の評価を帯びて尖鋭に意識されるのである。

## 2. <知っている>の逆機能、<知らない>の順機能

最近、<知らない>ままでいることを称揚する言説が耳朶に触れることが多い。一例を挙げれば、「しかし、知識はこのような光の側面のみでは語れない。知識をもつことによって生じる問題もよく経験する。先入見や偏見によるバランスを欠く判断や決めつけなどといった明らかにマイナスのものもある。それほどでなくとも、知っているがゆえに感激や知的好奇心が薄れるということもある。また、知識のあることは、副産物として、当該の知識を持たない者への優越感などのかたちで、驕慢を生み出すこともある」（西村、2000：50）。ならば、いっそのこと、知識などもたぬ方がまだましではないか、ということになる。

こうした主張の根底には、知の断片化・商品化、ゴミ情報（ジャンク）の氾濫といった、現代知が陥っている頹落状態に対する狼狽、懸念、不信、嫌悪の感情が渦巻いているようだ。押し寄せるジャンクなデジタル情報への対応を考えただけでも、それは①私たちから多大な時間と労力を奪い、②しかも、私たちの情報処理・判断の能力の限界を容易に超えてゆく。その結果、③私たちに未処理・未消化による情報フラストレーションを抱えこませる一方で、④知への関心や感受性を鈍化させ、反応力や判断力を低下させる（よって実際に、重要な情報や深い知識に接したとしても容易に素通りしてしまうことになる）。また、⑤なまじジャンクが苔むした生兵法があるために、それがバイアスとなって自らの思考過程を束縛し硬直化させたり、あらぬ方向に迷走させたりしてしまう。あるいは⑥一知半解な大量のジャンクで頭が水膨れした酢豆腐は、思いあがって自らを一端の物知りと錯覚してしまいがちである。そうであるならば、むしろ<知らない>ままにいる方がまだましではないかと考えても、あながち不自然とはいえない。

さまざまな知の間にみられる不均衡で歪曲した連関も、深刻な問題を投げかけている。もはや言及するのも食傷するが、現在の原発技術の水準では、操業・運転の技術知はとりあえずあったとしても、十分な制御知は存在しない。とりわけ過酷事故ないし最大予測事故以上の事故が発生した場合に対する有効な対処法・制御法を私たちは<知らない>。運転知と制御知とのこの極端な不均衡はコンティンジェントな人為的巨災の誘因であると同時に、実際に発生した場合の巨災に壊滅的結果を引きおこさせる主因となる。ならば、いっそのこと、身のほど知らずの巨大技術の知など持たぬほうが身のためではと思ひ至るのも当然であろう。<知らない>というメタ知が技術知の限界知として深まれば深まるほど、この思いは強まるはずである。医療の分野でも、現代人は深刻な問題に直面している。診断に関する技術知が急速な進歩を遂げても、治療に関する技術知が漸次的にしか進捗をみなければ、診断知と治療知との懸隔は広がるばかりである。思慮もなく安易に出生前診断を受診した妊婦。検査結果に驚愕し狼狽え混乱のすえ、結局、……。惑乱と悔恨と呵責の絢交ぜ心情のなかで、こんなことになるなら、いっそのこと、何も知らなかった方がまだ……と叫ぶのは自然だろう。あるいはまた、現在の治療知の水準では、高水準の診断知によって最悪の検査結果を告げられた患者に対し、なす術もなく見守るしかないという事態も起こることになる。診断知と治療知とのこうした著しい不均衡によって、そうと知らなければ少なくとも最終末期までは心穏やかな生を送れたかもしれぬものを、そうと知ってしまったばかりに……。ならば、いっそのこと、知らなかった方がまだましでなかったか、という痛切な思いが本人や家族に湧きあがったとしても不思議ではない。

元来、死の不可避性についての一般知の確実性と死の具体的な日時についての個別知の不確実性という非対称性が、私たちを自己の死についての表象が引きおこす絶望と恐怖から救ってくれていた。私の不可避的な死についての確実な知が、その個別知の不確実性のために、通常は三人称的な一般性の様相にとどまり切実な一人称的な知に転化しなかったからである。「生まれてきた以上は死んでいかねばならず、生きているかぎり不幸から逃れられることはできないということ以外に、確実なことは何もない」とは、クリチアスが残した片言である（山本、1994）。この古代ギリシアの筋金入りの懐疑論者でさえ、個の必死についての知の確実性を疑うことはなかったが、それはあくまでも普遍的で抽象的な必滅についての三人称的な知にすぎなかった。懐疑論者でさえ疑いを挟むことのない死の必定にもかかわらず、私たちがかくも安逸と頹落に浸っていたのも、私の死がいつ到来するのか、通常は誰も知らないし知ることができなかったからである。しかしながら、古来、このように、私の死に私が直截に対峙することを回避させてくれ、「知らぬが仏」の実存版を成立させていた、死の不可避性についての三人称的な知と私の死について

ての一人称的な無知との亀裂が、まさに医療知識・技術のいびつな進展によって、徐々に消えてゆく気配にある。ひとはこれを医療知識・技術の進歩と呼ぶ。

こうした事例では、理論的連関ないし実践的・規範的視点からみると、対象知 A の内容が、新たに獲得された対象知 B の内容と比較して、著しい欠損を示しているとメタ知 A によって強く認識されている点（「B がわかっているのに、A についてあまりにも知らなすぎる」）が特徴的である。対象知 B の内容が突出すればするだけ、対象知 A の遅滞の際立ちがメタ知 A に反映されるのである。かくして、〈知っている〉ことがかえって逆機能として働き、〈知らない〉ことの方がむしろ順機能として作用する可能性は、今後いっそう増していくかもしれない。知の所有過多や不均衡が純粋に知の領域を越え、規範や倫理の問題域にまで及んでゆくとき——そしてこれは不可避である——、この可能性はさらに高まるはずである。そこで「知らない権利」という要求が生じることになる。しかし、すでに触れたように、現実的・具体的に〈知らない〉ためには「何について知らないのか」を現実的・具体的に知らなくてはならない。「何について知らないのか」を現実的・具体的に知ることは、それを鮮烈に意識の中心に据えることであり、純然とした「知らぬが仏」が示す単純で無邪気な無知とはもはやほど遠い精神状態である。しかも、「知らない権利」が一般的な社会意識となり、また公的に制度化されていけばいくほど、「何について知りたくない」のかを明確に意識し表明することを強いられることになり、「知らぬが仏」の無垢なる本源的状態に回帰することは困難になるであろう。現在の医療現場ほど、〈知らない〉ということもやはり知のひとつの様態であることを痛感させるものはないといえよう。

プロタゴラスの口上なるプロメテウス神話では、生活のための技術知は授けられていながら、国家社会をなすための知はそれを知る最低能力しか与えられていないという、人間の知の原初的な状態の問題性が語られて印象深い（プラトン、1988）。この神話は、すでに人間の知の根源的本質そのものに、領域間・類型間における発展水準の不均衡や不調和、ある事柄における〈知っている〉と別の事柄における〈知らない〉の不均衡が深く刻み込まれていることを指摘しているのである。もしこの不均衡が少なくとも当座は不可避であるとするなら、禍根を残すような知の不均衡が著しく拡大される恐れがある場合には、純粋無垢なる「知らぬが仏」は無理だとしても、半ばそれと知りながら、それでもあえて〈知らない〉を決めこむことのできる知の戦術的様式の可能性を真剣に追及すべき時期に、私たちは来ているといえるだろう。

### 3. 〈知っている〉ことは〈知らない〉ことだらけ

〈知らない〉ことは〈知っている〉ことに絶えず付きまとい、〈知っている〉ことの内奥に深く浸潤し、その深層で互いに絡みあっている。このことは、〈知らない〉と〈知っている〉とを知の統一的な動的過程として把握するうえで決定的に重要な視点である。しかし同時に、あまりにも日常的に馴れ親しんでいるために、かえって意識を素通りしていきがちな「自明性のトラップ」のひとつでもある。〈知っている〉に絡みつく根源的に〈知らない〉ことを、いくつか挙げてみよう。

(1)まず、アウグスティヌス『告白』の時間論の有名なくだりから。「私たちが会話のさい、時間ほど親しみ深く熟知のものとして言及するものは何もありません。それについて話すとき、たしかに私たちは理解しています。他人が話すのを聞くとときも、私たちは理解しています。／改行／ではいったい、時間とは何でしょうか。だれも私にたずねないとき、私は知っています。たずねられて説明しようと思うと、知らないのです」（アウグスティヌス、2014）。ここでは、アウグスティヌスの時間論そのものが問題なのではない。文中、「時間」を「空間」や「存在」、「世界」

や「私」、「社会」や「貨幣」などに置きかえてみても、十分にその文意が通じること注目したいのである。それは、この個所が時間概念にのみならず、原基的で根源的な究極概念一般の指示的定義となっていることを示唆している。究極概念とは、他のより基礎的で単純な概念によって説明したり、それらに還元したりできない一方、一定の知識共同体の多くの成員に〈自然に〉に共有されている（と成員間でみなされている）観念である。こうした究極概念の際立った特徴は、それが、概念的思考を組織化する機能として作動するが、まさにそれゆえに概念的思考の直接的な対象（内容）にはならない、なりづらいという点にある。私たちは、こうした究極概念を作動させなければ思考できないし（したがって何かを知ることできないし）、また基本的に作動させることができる（つまりその意味では〈知っている〉）のだが、しかし原理的な理由から究極概念の本質規定それ自体を知ることにはできないのである。〈知っている〉と知っている本質規定も、そのときどきの文脈や関心、視点や前提知識に左右されて、せいぜいその一面を単離して言語的・論理的造形を施したものにすぎず、根底的には、明示化されない共有観念に暗黙の裡に寄りかかっているのであり、また寄りかかざるを得ないのである。しかも、究極概念自体は、まさにそれが根源的・究極的であるがゆえに、知識共同体によるもろもろの知の蓄積・深化をその内部に凝縮的に反映させることで不断に自己変容を遂げていくであろうから、その本質を明示的に対象化する試みはますます無化していくことになる。要するに、現実世界を構成する、ないし成立させている（と思われている）根源的な客観的对象・原理にせよ、あるいはまた私たちの認識や思考、〈知っている〉ことの主体的な前提条件を形成している（と思われている）根源的な概念にせよ、結局、私たちは〈知らない〉のであり、〈知ることができない〉のである。かりそめにもデュ・ボア・レーモン（1988）の「宇宙の七つの謎」が知り尽くされることがあったとしても、「われらは知らず、知らざるべし（Ignoramus, Ignorabimus）」という成句の有効性が失われることは、当面ありそうにもない。

(2) いまさらそのような形而上学的な世迷言をと眉をひそめる向きには、現代物理学がひとつの認識形式として示す根本的制約に触れてみよう。現代物理学は数々の重要な基本法則と基本方程式を定立し、光速やプランク定数のような非常に重大な普遍定数を確定してきた。しかし、こうした科学知の最上の成果をつうじて私たちが〈知っている〉のは「～である」ないし「いかにして～であるのか」であって、基本法則や基本方程式が示す「いかに」が「なぜ」そうなのか、普遍定数が「なぜ」まさにその値をとり、他の値をとらないのかは〈知らない〉のである。物理学的な認識にとって、この「なぜ」への知的関心は形而上学の残滓であり哲学的な夾雑物にすぎない。しかし、その「なぜ」への返答を欠いた、というより「なぜ」の問いをはじめから排除した知は、やはり私たちの知的関心を十分に満足させるものではない。ある対象の「いかに」を知ったとしても、「なぜ」を知らなければ、結局、それがいったい「何であるのか」、本質規定を知ったことにはならないとを感じるからである。これに伴う「満ち足りなさ」が、再び形而上学へと私たちを向かわせるのである……ときとして不合理でオカルト的な糜爛様態をとりながら。

(3) 「水は100℃になると (A)、水蒸気になる (C)」(A→B)。なぜか。「100℃になると、沸騰するから (B)」(A→B、B→C)。なぜか。「100℃になると、水の分子が自由に動くようになるから (B′)」(A→B′、B′→B、B→C)。なぜか……（長尾、2001）。この逆行過程はどこかで行き詰まる。つまり、どのようなものであれ、〈知っている〉ことの最後は必ず〈知らない〉ことに帰着する。どのような知であれ、〈知らないこと〉をつねに根底に宿している。壮大な精密知の殿堂も、とどのつまりは、不知という砂上にそびえ立つ楼閣にすぎない。あるいは、こうもいえる。知はブラックボックスだらけ。ブラックボックスの前後は〈知っている〉が、その内部は〈知

らない>。しかも、そのブラックボックスのそれぞれがまた、その内部にさらなるブラックボックスを潜在的に内蔵し、その潜在的に内蔵されたブラックボックスがまた……。ブラックボックスの無限入れ子構造。これが知の基本構造のある断面を形成している。別言すれば、何かを知れば、必ずそこに<知らない>の連鎖、ブラックボックスの累積が出来する。<知っている>には、つねに<知らない>が付きまとい離れない。それどころか、私たちが知れば知るほど、<知らない>ことは膨れあがっていくのである。

(4)個人が所有する知に着目してみよう。知識共同体の知の総体が増大していけば、個人の知は絶対的には増大しても、共同体の知の総体と個人の知との落差は一段と拡大する。これは個人の<知らない>ことが、<知っている>ことの絶対的な増大をはるかに上回るテンポで増大していくことを意味する。この傾向は、知の分業化・専門化と高度化・複雑化が進展すればするほど顕著なものとなる。私たちを取り巻く機器・道具の類に関する知が好例である。用途や使用法についてはそれなりに<知っている>。が、その仕組みや機能原理に関してはほとんど何も<知らない>。手段システムの拡充によって私たち一般人の手段知は増大するが（ある目的の実現のために何をどう使えばよいのかはよく<知っている>が）、その根拠・原理に関する基本知のブラックボックスは異様なほどに膨張していく。高度文化はあらゆる個人における<知らない>ことの爆発的増大を帰結し、しかも、この事態そのものについての多重の意味での<知らない>ということ、つまりメタ次元での無知と無自覚、愚鈍と無頓着を基盤にして繁茂しているのだ。

#### 4. <知らない>と<知る／知っている>の螺旋階段

<知らない>という知の様態は、すでに触れたように、ある対象についての知の内容(対象知)が欠如している、あるいは少なくとも十分ではないというメタ知、自己言及的な反省意識をその不可決な契機として含んでいる。さらに、このメタ知には、対象知についての認知上の意義や価値や機能についての判断も含まれる。この両種のメタ知が明確で強烈に作動すればするほど、<知らない>は積極的に能動的な知の様態となる。そして少なからぬ場合に、それは「懐疑」「疑念」「疑問」、さらに「問い」を触発する。興味あることに、当事者の一人称的・主体的な<知らない>は、すでにみたように、「～であること」、つまり大なり小なり確定された対象知の内容をその目的語にはとれないが、「XがPかどうか」、「Xが何であるのか、どうであるのか……」といった間接疑問文を目的語にとることができる。あたかも、疑問文への転化を予測し誘惑しているかのようである。この「問い」が新たな知の獲得を目指すきっかけとなりうることはいうまでもない。<知らない>は、そのメタ知が強く作動すると、大半が疑問形式を回路として、<知る>を誘発するのである。つまり、<知らない>は、少なくとも高品質、高性能のものであれば、決して否定的で消極的な知の様態にとどまるものではないのだ。

一方、新たに知することは、それまで知られていなかった新たな<知らない>を帰結することがある。世界中の民族から集めたピロリ菌の遺伝情報の変異や地理分布の比較から、ピロリ菌の進化過程は人類の世界各地への拡散過程と重なることが判明。しかし、なぜピロリ菌がこれほど長期にわたり人類と共存できたのか、新たな謎が生じたという。地震学者は、自身に至る筋書きは前兆すべりも含めて多岐にわたり、知れば知るほど複雑になり、一を知れば知らないことが十に増えると呻く。超新星の観測により、予測とは逆に宇宙膨張は加速しているとわかり、それに関与していると考えられる暗黒物質の存在を示唆する証拠も出始めているが、この暗黒物質の正体がいったい何なのか、天文学者は新たなブラックボックスを抱え込んでいる云々……。

このように、真正の革新的な知見であればあるほど、既知の<知らない>を<知っている>と

いう様態に転化させて単に知の空隙を埋めるだけではなく、空隙の前後の連関に断裂や不整合、捻じれや反転を引きおこしたり、それまで未知の根本的で高次の〈知らない〉を「創出」したりするのである。いや、よく〈知っている〉（と思っている）ことから、未知の〈知らない〉ことが立ちあがり得る。〈知らない〉は一定の〈知っている〉ことを前提にし、一定の〈知っている〉ことから発酵するのである。その場合でも、知の〈知らない〉様態が〈知る〉様態に向かうときには、——たとえばミッシング・リンクの探索では、ターゲットが前後の環に関する知から挟み撃ち戦法によって絞られていくように——その枠組みや方向づけや制約要件はすでに〈知っている〉ことによって規定されている。既知の対象知Aが〈知らない〉というメタ知モードBに変態し、これがその新たな対象知Bを触発し、この対象知Bが……等々。〈知らない〉をその断片的・部分的、あるいは一時的・瞬時的な様態それ自体で実体視すれば、否定的・消極的な意味や機能しか生じないかもしれない。しかし、知の時間的・空間的な連関において捉えれば、〈知らない〉と〈知っている〉は互いに対立しあうと同時に互いに誘発しあい、相互に制約しあうと同時に相互に補完しあう知の二つの様態・契機であることが判明する。

いずれにせよ、私たちに必要なのは、怠惰で無気力、退嬰的で非生産的なく知らない〉ではなく、シャープなメタ意識に富んだ積極的なく知らない〉であり、深く〈知る〉ことの触媒、いや母体となるような能動的で生産的なく知らない〉である。あるいはまた、〈知る〉ことが逆機能を招くと感知されるならば、あえて無知を装う賢明で自己策略的なく知らない〉である。〈知らない〉と〈知っている〉は相まってはじめて、知の動的過程を形成し螺旋軌跡を描いてゆくのである。この理解を、「無知の知」の現代的なスタンスとすべきではなからうか。

## 参考文献

- ・アウグスティヌス、A. (2014)『告白Ⅲ』（山田晶訳）、中公文庫。
- ・池田光義 (2012)『『否定知』『メタ知』考』（跡見学園女子大学）『人文学フォーラム』第10号。
- ・岩田靖男 (1995)『ソクラテス』、勁草書房。
- ・デュ・ボア・レーモン、E. (1988)『自然認識の限界について・宇宙の七つの謎』（坂田徳男訳）、岩波文庫。
- ・長尾 真 (2001)『『わかる』とは何か』、岩波新書。
- ・西垣 通 (2013)『集合知とは何か ネット時代の『知』のゆくえ』、中公新書。
- ・西林克彦 (2000)『知識の光と影』『新曜社総合図書目録』30周年特別号。
- ・納富信留 (2003)『ソクラテスの不知——『無知の知』を退けて——』『思想』4月号。
- ・プラトン (1988)『プロタゴラス——ソフィストたち——』（藤沢令夫訳）、岩波文庫。
- ・山本光雄 (訳編) (1994)『初期ギリシア哲学者断片集』、岩波出版。